

志望の「きっかけ」を「動機」に変え、 目標と現実とのギャップを埋めるストーリーを描く

茨城県・私立江戸川学園取手中・高校

茨城県・私立江戸川学園取手中・高校では、近年、生徒の主体性を引き出す指導に力を入れてきた。生徒に目標を持たせるとともに、目標と現実とのギャップをどう埋めるのかを考え、その解決策を実行することを通じて、自律的に成長する力を伸ばしている。また、多様な体験の中で得た気づきをアウトプットさせることで、自身の課題を客観的に捉える力も育成している。

志を高めるには「きっかけ」を「動機」に変えることが大切

茨城県屈指の進学校の1つである私立江戸川学園取手中・高校は、コロナ禍の中、2021年度大学入試において、さらに大きく進学実績を伸ばした。東京大学合格者5人に加え、筑波大学医学類合格者7人は5年連続全国1位。医学部医学科合格者数は111人と、同校の過去最高を記録した。進学実績が伸びた要因は、生徒の主体性にある。

性を育成する指導を模索してきた。それは、これまで同校が重視してきた「手厚い指導」からの転換の必要性を、誰よりも教師が感じていたからだ。かつては大量の宿題・課題を与え、長期休業中もほぼ毎日登校させて生徒を支えてきた同校だったが、5年前、竹澤賢司前校長が「Society 5.0」を見据えた学校改革を提唱。自ら価値を創造する人材の育成のために、管理型の教育を改め、生徒の主体性を伸ばす指導へと舵を切った。

や志を持たせることだ。進路指導部部長で医科コース担任の熊代淳先生は、次のように説明する。「目標と現状のギャップがどれくらいあるかが分からなければ、自分で学習や生活を改善しようといった主体性は生まれません。将来したいことは何か、それを現実させるためにどの大学・学部で何を学ぶのか、目標の大学に入るために必要な学力は身につけているのか、不十分な場合はそのギャップを埋めるために何をすればいいのか――。生徒の主体性を引き出す上でまず必要なのが、夢や目標

を持たせることです。大きな目標を描かせることで、志望校へのこだわりが生まれ、それは受験勉強を乗り越えるモチベーションにもなるのです」（熊代先生）

夢へと向かう生徒の志を育む上で教師が大切に行っているのが、『きっかけ』を『動機』に変えるための手助け』である。

「例えば、医科コースの生徒は、医師になるという希望を持っていますが、生徒の話をよく聞いてみると、医師になりたいと思っただけで、『きっかけ』はあっても、何となく実現させたいという

『動機』を持っていないことが少なくありません。『きっかけ』を実際の行動につなげて、志望校合格までに立ち足る壁を乗り越えていくためには、自分が未来にどうなっていたいのかといった『動機』が必要だと、生徒に伝えています」（熊代先生）

「きっかけ」で止まっている生徒は、志望理由書の中で使われている動詞が過去形に終始しているのに対し、「動機」を持っている生徒は、自分が大学で何をしたいの

かを伝えようとするため、未来形の表現が多くなると、進路指導部副部長の野村峻先生は説明する。

「志望校への強い憧れを持っていても、志望動機を明確に言えない生徒は少なくありません。志望したきっかけと大学の学部・学科で学ぶ内容、将来の夢を一本の線の上に乗せて、自分の幹を作っていくことが大切だと、生徒に伝えています。過去の自分の経験や思いを整理し、大学でどのように成長し、社会とどのようにかわっていくのか。一本筋の通ったストーリーを構築する手助けをすることが教師の役割だと考えています」

目標探しや志の向上のため、多様な体験の機会を提供

同校では、生徒が夢や目標を見つけられるよう、体験の機会を数多く設けている。もともと同校は、「心豊かなリーダーの育成」を教育理念に掲げて、「心力・学力・体力の三位一体の教育」を実践しており、特に「心力」を高めることを目的として、学校行事を充実

させてきた。例えば、医科コースでは、「きっかけ」を「動機」に変えていくために、現役の医師や研究者の講演会、病院実習などを頻繁に行い、生徒が将来を具体的に考えられるようにしている。

加えて近年は、ボランティア活動やコンテストなど、校外活動への参加も勧めている。参加者募集がある度に「Classi」(*)で全生徒に知らせ、参加した活動については、「Classi」のポータルフォロに入力させて、通知表や調査書に反映している。地域でのフードロスの軽減活動のボランティアや起業アイデアコンテスト、科学オリンピックなど、活動は多種多様で、1学期間に複数の活動に参加する生徒もいるという。

それらの体験は、学校推薦型選抜や総合型選抜のためではなく、あくまで目標探しや志の向上など、その生徒ならではの「マイ・ストーリー」を形成するための「原体験づくり」の場というのが、同校のスタンスだ。商品開発のプロジェクト学習を通じて「人を喜ばせたい」という自分の価値観に気

づく、あるいは、海外留学を通じて「グローバルに活躍したい」といった志を育む。体験を通じて、「人や社会のために働く」といった気持ちを育むのもねらいだ。

「将来、お金を稼いで高級車に乗りたいといった利己的な目標も、確かにモチベーションにはなりませんが、自分が我慢すれば、諦めることもできる弱い動機です。一方、『子どもを救うために、小児医療に貢献したい』といった利他的な目標は、簡単には取り下げられないものです。受験勉強が最も苦しい時、諦めずに粘り強く取り組むためには、揺るぎのない目標を掲げることがとても大切なことだと思います。多様な体験は、自分と社会との接点を見つかる上でも意義が大きいと考えています」（熊代先生）

定期的な振り返りを通じて自分の価値観に気づかせる

多様な体験を通じて得た気づきを「マイ・ストーリー」の軸となる目標や志として結実させるため



野村 峻 のむら・しゅん
進路指導部副部長
東大コース担任
教職歴10年。同校に赴任して6年目。社会科(地理)。



熊代 淳 くましろ・あつし
進路指導部部長
医科コース担任
教職歴16年。同校に赴任して9年目。数学科。

学校概要

設立 1978 (昭和53) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年440人
2021年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、名古屋大、大阪大などに127人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ1503人が合格。

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

には、頻繁なアウトプットによる振り返りが重要になる。

同校では、中学1〜3年次は道徳の時間で、高校1〜3年次はLHRの中で月1回、自分の考えを言語化する活動を行っている。生徒は、B5判のノート1ページに、テーマについての感想や考えを書いて提出。担任は、クラス全員のノートを見てコメントを返す。

LHRのテーマは、「心力」の育成にかかわるものを担任が自由に考える。例えば、熊代先生のク

ラスでは、今年5月に、「マズローの欲求階層説」に基づいて、高

な目的や使命感を強く持つほど、受験に向かう気持ちが強くなるという話をした上で、生徒に「何のために医師になるのか」をノートに書かせた。

生徒がノートに記述する内容は、テーマに直接かわるものだけでなくもよいと伝えている。テーマから派生して、自身の体験や将来の目標について書く生徒もいるという。

図1 野村先生の学習手帳（抜粋）

2. 現状分析
 全国の中で自分の位置を知るものとして、今の皆さんには7月12日（月）に実施された第1回高2ベネッセ総合学力テストがあります。最近の目標などもいろいろありますが、自分自身の成長のためにも一度しっかりと見直しをしましょう。そのうえで、自分の現在の位置と目標の間、差を分析を把握しておくようにしましょう。今の自分の実力が（目標）を達成するよりも高い目標（より高いレベルの大学を目指す）は自分自身で目標値を調整する）を設定することで、よを目指していきましょう！

●第1回高2ベネッセ総合学力テストの結果

| | 英語 | 数学 | 国語 | 英数国 |
|-----|------|------|------|------|
| 得点 | /100 | /100 | /100 | /300 |
| 偏差値 | | | | |

●志望校と今の自分の「差」をチェック！
 <国公立大学編！>

| | 英語 | 数学 | 国語 |
|------------|---------|----|----|
| ①第1志望校の偏差値 | | | |
| ②自分の偏差値 | | | |
| A | ①-② | | |
| B | 標準偏差+10 | | |
| C | A×B | | |

現2年生用に野村先生が作成した「学習手帳」。目標と現実とのギャップを知り、夏季休業中に取り組む学習について具体的に考えさせることがねらいだ。 ※学校資料をそのまま掲載。

「その時々考えたこと、最近

の体験で得た気づきなどを書くうちに、将来に向けた見通しや自分の適性などが少しずつ見えてくることもあり。そのように、時々心の変容を書き留めておくと、いざ自分の進路を本格的に考える際に大いに役立つ材料になります」（野村先生）

一方、生徒が日常の思いを記録するツールには、「Classi」のコメント機能を活用している。書き込む内容は、学習状況から勉強の悩み、その日にあった出来事まで幅広く。担任は生徒のコメントに対して返信を行い、アドバイスや励ましを送っている。

そのほか、夢や目標をアウトプットする機会として、毎年12月に「夢を語る会」を実施している。1・2年生から選ばれた各学年3人の生徒が、全校生徒の前で自分の将来の夢と、そのために今努力していることをプレゼンテーションソフトを使って発表。その上で、全校生徒が自身の夢や目標をテーマに作文を書く。そこにも、多様な体験から得た気づきが反映され

ることが多いという。

生徒は多様な活動をする中で、他者に伝えずにはいられない体験をし、それを言語化することで、自分の心の変容がより鮮明になる。それに対して教師がコメントを返すと、生徒は喜び、その後も頻繁に意見交換が行われる。そうしたサイクルが回ることで、ノートや「Classi」のコメントが、実質的にポートフォリオの役割を果たすようになるという。

「参加した取り組みすべてについて、感想や気づきを書かせる方法もあると思います。しかし、体験の機会を設ける目的は、夢や目標を持たせることにあるので、何も響かない体験があってもそれでもよいと思っています。本当に心に残った体験さえ書き残すことができれば、後々、生徒が自分の歴史を語る際の材料としては十分でしょう」（野村先生）

生徒が自由に気づきをアウトプットする機会を担保し、その声を教師がしっかりと受け止めることが、自分の価値観や適性に気づくことにつながるのである。

模擬試験や定期考査の結果を基に、
目標と現実のギャップを認識

将来の目標や志望校が決まった後は、その実現に向けて理想と現実のギャップを埋める道筋を描き、それを実行していくことが重要になる。教科学習での「マイ・ストーリー」を生徒が描くために、野村先生が21年度の2年生に対して実践しているのが、学習手帳の活用だ。

志望校の偏差値と入試科目を調べさせ、模擬試験の結果から、各科目においてあと何点上乗せする必要があるのかを考えさせた上で（第1志望の偏差値－自分の偏差値）×「標準偏差÷10」で求める）、次の模擬試験で何点取ることを目標にするのか、その達成のために夏季休業中に自分がすべき学習内容は何かを具体的に考え、その結果を手帳に記入させる（図1）。

21年度1学年では、前期・後期それぞれで行われる三者面談において、生徒自身に目標を語らせる時間を設けている。定期考査または模擬試験を振り返り、どのよう



写真1 生徒の発表で始まる三者面談。当初、熊代先生のクラスのみでの取り組みだったが、21年度から1学年全体での実施に拡大した。

な学習をしたのか、目標まであと何点必要で、今後どのような学習をするのか、20〜30分間の三者面談の冒頭5〜10分間を使い、プレゼンテーションソフトや紙の資料を使って保護者と教師の前で発表させる（写真1）。発表資料のフォーマットは、教師が用意。今期の得点、志望校の偏差値、目標

点、目標点まで必要な点数を記入する仕様とした。

「三者面談は保護者と教師の対談になりがちですが、本来の主役は生徒です。生徒自身に目標と現実のギャップを語らせることで、生徒のメタ認知を高めるのがねらいです」（熊代先生）

大学入試では、我が子を思うがあまり、しばしば保護者が子どもに過干渉になってしまい、生徒の主体性を阻害してしまうことがある。生徒の口から目標を語らせることは、保護者が子どもの主体性を信じ、程よい距離感を保つようになる効果もあるという。

目標に向けて改善を 重ねるプロセスが大切

指導の成果は、卒業生の姿に表れている。

「以前は、学校を信じていれば大丈夫だからと、教師に言われたことだけに取り組む生徒が多かったです。しかしここ数年、在校生に受験体験を語る卒業生の話を聞くと、在学中に自分で手帳を作っ

て計画的に学習したといった経験などが語られるようになり、自分に何が必要なのかを考えて行動する力、自分がなせうまくいったのかを客観的に分析できる力が身につけていると感じます。社会に出ても、自分の力で道を切り開いてくれることを期待しています」（熊代先生）

高い目標を掲げたからこそ、夢がかなわなかった生徒もいる。

「大学入試を通して学んでほしいのは、目標の達成に向けて不断の改善をするプロセスです。残念な結果に終わったとしても、少しでも合格に近づけたという自信や、やり遂げた満足感があれば、将来、新たな目標が見つかった時に、その達成に向けて努力する思いが湧いてくるでしょう。私たち教師も大学入試の結果にとらわれず、社会で出会う困難に対して前向きに頑張れる人材を育む指導を模索し続けていきます」（野村先生）

「マイ・ストーリー」を描き、未来を創ろうとする経験は、生徒にとって、人生を通じて生きる財産になるのだろう。